

翻訳が生み出される磁場

——武田泰淳と丁玲

山本 幸正（復旦大学）

キーワード：武田泰淳・丁玲・沈從文・翻訳研究・女性表象・去りし後（他走后）

はじめに

ある言語の中に生み出された文学作品が、別の言語に翻訳されるとき、どのような磁場が存在し、どのような力学が働いているのだろうか。なぜ他ならぬその文学者の、他ならぬその作品が、翻訳の対象として選ばれることになったのか。

これは答えることがなかなか難しい問題である。偶然と言われてしまえばそれまでのようにも思われるが、しかしその偶然が生まれるに至るプロセスを考えてみると、そこにはさまざまな社会的、歴史的等々の条件が、複雑に絡み合っていることが見えてくる。

まずある言語で作品へと結実する文章が、たとえ作品という概念にふさわしい完結したものとなっていなくても、書かれなくてはならない。もちろん作品とみなされるような文章が生み出されるに至るまでは、多種多様な要因が複雑に絡まり合っている。次に、その作品が何らかの形で人目に触れる機会を得なければならない。書籍として刊行されなくても新聞や雑誌などで発表されるか、少なくとも原稿用紙などの紙片が書き手以外の手に渡る必要がある。さらにその文章の読み手の中に、翻訳者となる能力と可能性を秘めた存在が、もしくはそうした

人にその文章を紹介し得る人が、紛れ込んでいることが必要である。そして、その翻訳者になり得る存在が、読んだ文章を翻訳する意志を持ち、それを実行に移さなければならないのだが、実行に移されただけでは、その翻訳の存在が認知される可能性も低くなる。むろん紙片に書き付けられてさえいれば、後に陽の目を見ることもなきにしもあらずだが、やはり忘れ去られてしまう可能性が圧倒的に高い。だから翻訳が翻訳として認知されるためには、発表される必要がある。しかし発表されるには、さまざまな条件をクリアしなければならない。編集者や出版社の意向もある。出版界の状況も大切だ。その際には、発表された翻訳を受容する読者のことも考えなくてはならない。

ごくごく簡単にまとめても、ある言語の中に生み出された文学作品が、別の言語の中に居場所を手にするようになるまでのプロセスは、あまりに複雑だ。奇跡的といってもおかしくないようないくつもの出会いに導かれなければ、ある作品が翻訳され、別の言語の中に存在するようになることなど、実現されるはずもないのである。

加藤周一が述べていたように、明治維新以後、翻訳は国家的な「事業」と化した。「西洋の文献に学ぶことは、急務であり、日本国民の圧倒的多数が原文を自由に読むことは不可能である。この二つの条件は、西洋の広汎な文献の翻訳を必要不可欠のもの」と⁽¹⁾したからである。近代以後、次から次へと翻訳が生み出される光景は、

(1) 加藤周一「明治初期の翻訳——何故・何を・如何に訳したか——」、加藤周一・丸山真男校注『日本近代思想体系 15 翻訳の思想』岩波書店、1991年9月、349頁。

日常に属するものとなっている。もの珍しさはない。言うまでもなく、近代になって「文学」という概念で括られ認知されるようになった言説の集合体も、その例外ではなかった。

ドイツ文学研究者の大山定一は、「翻訳文学」というものは今日当然書かれていなければならぬ文学作品を、言わば翻訳という形で示したものと考えたいのです⁽²⁾と述べていた。これをふまえて井上健は、「成長途上の自国文学の空隙をしばし埋める役割を担うべきものとしてあった」のが「翻訳文学」だったと述べ、それは「同時代の日本文学に、それまで供給されなかった主題や素材をふんだんに提供するとともに、日本文学いや日本にはいまだ根付いていない新しい感性や、新たなものの見方を導入し、新ジャンルや新概念を創出する、有効な触媒として機能していった」⁽³⁾と指摘した。すなわち「翻訳文学」とは、「新しさ」という進歩が信じられた近代という時代において、「新しさ」をもたらす重要な役割を担うものとみなされていたのである。

1934年3月に竹内好が中心となって、岡崎俊夫や武田泰淳ら若き中国文学研究者とともに結成された中国文学研究会の困難は、「新しさ」をもたらすものとして確保された「翻訳文学」の居場所に、同時代の中国で生み出されつつあった「文学」の翻訳を割り込ませようとしたところにあった。翌年3月に創刊された『中国文学月報』には定期的に「文学」の翻訳を掲載するスペースが設けられた。また1940年4月に『中国文学』と改名され、生活社から刊行される市販雑誌となった後に「翻訳時評」が開始されたことも、「翻訳文学」を重視する研究会の姿勢

を表している⁽⁴⁾。しかし、その挑戦は困難を極めた。というのもそれは、近代という時代に特有の磁場への挑戦を意味することになったからである。

1 中国文学研究会の位置

それにしてもなぜ中国文学研究会は、同時代の中国「文学」を対象としなければならなかったのか。よく知られているように中国文学研究会は、中国を対象としたそれまでの学問、近代以前からの「漢学」と、京都帝国大学で生まれた「支那学」を否定することから出発した。「官僚化した漢学と支那学」は「現実の支那の理解に対して無力」であり、「現代文化に係わりを持たぬ」ものとなっていたからである⁽⁵⁾。だが「現実の支那の理解」を目指すのであれば、必ずしも「文学」にこだわる必要はないはずだ。実際『中国文学月報』には、言語学や民俗学にかかわる文章も少なからず掲載されていた。中国の「現代文化」を理解するためには「文学」も有力な研究対象のひとつにはなるだろうが、それは無条件に中心に据えられるべきものではなかった。しかし中国文学研究会は、その名称が端的に示している通り、「文学」を中心に据えた。なぜ「文学」だったのか。

中国文学研究会が批判しようとしたのは、「古典支那」への尊重を担保しつつ、「欧米崇拜」に邁進する「現代支那」を貶めるべく日本語の内部に配置された中国をめぐる言説だった。そのためは、「文学」を理解することが必要不可欠だと考えられた。なぜなら「支那を近代として見る」ためには「現代支那が古典支那か

(2) 大山定一・吉川幸次郎『筑摩叢書 211 洛中書問』、筑摩書房、1974年7月、11～12頁。

(3) 井上健「序にかえて——翻訳文学への視界——」、井上健編『翻訳文学の視界——近現代日本文化の変容と翻訳——』思文閣出版、2012年1月、4頁。

(4) 第66号から設置された「翻訳時評」について、また中国文学研究会と翻訳のかかわりについては、熊文莉「中国文学研究会についての「翻訳」」(『朝日大学一般教育紀要』第36号、2011年1月)が詳しい。

(5) 竹内好『「中国文学」の廃刊と私』『中国文学』第92号、1943年3月。ただし引用は丸川哲史・鈴木将久編『竹内好セレクションⅠ——日本への／からのまなざし』(日本経済評論社、2006年12月、55頁～56頁)による。

(6) 竹内好『現代支那文学精神について』『国際文化』第57号、1943年7月。ただし引用は丸川哲史・鈴木将久編『竹内好セレクションⅡ——アジアへの／からのまなざし』(日本経済評論社、2006年12月、68頁)による。

ら非連続につながっているという歴史認識」⁽⁶⁾が必要であり、「現代支那」と「古典支那」を二分する五四運動を象徴するものが「文学、だったからである。竹内好は次のように述べていた。

つまり五四は、新しい精神の勃興によって前代との連続が断ち切られた時機である。その新しい精神を激成したものは、文学革命の運動であった。従って文学革命は、現代支那の精神的揺籃であると共に、裏から見れば、それによって現代支那の文化的性格がいちじるしく文学的に規定づけられているように私は思う。⁽⁷⁾

それゆえ五四以後に生み出された中国の「文学」は紹介されなければならない。しかし、同時代の中国「文学」を日本語の内部に招き入れようとするだけで研究会は、欧米の「文学」から「新しさ」を吸収する役割を担っていた「翻訳文学」への挑戦を必然的に強いられることになったのである。

容易に想像のつくことではあるが、五四がもたらした「現代支那の文化的性格」は中国にとっては「新しい、ものであっても、日本にとっては必ずしも「新しい、ものではなかった。むしろそれらは、たとえば「戦前も戦後も根本的な変化がない」「中国にたいする侮蔑感」に支えられた日本の「中国観」⁽⁸⁾に変容を強いるものであり、その意味では看過することのできない「新しさ」をもたらす可能性を秘めていた。だがその「新しさ」は、あくまでも可能性の中に宿っていたものであり、それはたとえば竹内好のすぐれた批評があって、はじめて救済され

得るものだった。意識的であったのか無意識的であったのかにかかわらず、「侮蔑感」を根底にした「中国観」を自明の理としていた者にしてみれば、「極端な盲目的な欧米崇拜の如く」映じる中国の「外貌」に「新しさ」を感得することは困難である⁽⁹⁾。そうした「外貌」はせいぜい明治以来の日本の出来の悪い二番煎じでしかなく、むしろ「新しさ」とは真逆のものを感得させるように機能した。敗戦後に竹内好が見事に剔抉したように、「日本文化の代表選手」である「優等生」は、「一步でも先へ出ろ」をモットーに「優秀なものを受け入れる能力」を存分に活用し、「自分たちが優秀なのはヨオロッパ文化を受け入れた結果である」ことを疑うことなく、「おくれた東洋諸国を指導してやるのが自分たちの使命だ」と信じ込んでいた⁽¹⁰⁾。そうした「優等生」たちが、同時代の中国の「文学」に何らかの「新しさ」を感得するなど、どだい無理な話だった。それゆえ「新しさ」をもたらすものとして居場所を確保していた「翻訳文学」の磁場に、同時代の中国「文学」の翻訳を割り込ませる余地を作り出すことは、至難の業だったのである。

このような状況下で、武田泰淳はなぜ丁玲の翻訳を発表することができたのか。後に戦後文学を代表する文学者のひとりとなる武田泰淳が、文学者として認知されるようになったのは、1943年4月に東洋思想叢書の一冊として日本評論社から『司馬遷』が刊行されて以降のことである⁽¹¹⁾。しかし丁玲の翻訳が発表されたのは、それ以前のことであった。当時の泰淳は、中国文学研究会に所属する若手の中国文学研究者のひとりではなかった。他方で丁玲は、中国では文学史に必ずその名が出る著名な女性作

(7) 同上、73頁。

(8) 竹内好「日本人の中国観」『展望』第45号、1949年9月。ただし引用は『竹内好セレクションⅡ』（前掲書、146頁）による。

(9) 竹内好「現代支那文学精神について」前掲書、71頁。

(10) 竹内好「近代とは何か（日本と中国の場合）」、東京大学東洋文化研究所編『東洋文化講座』第3巻、白日書院、1948年11月。ただし引用は『竹内好セレクションⅡ』（前掲書、207頁～212頁）による。

(11) たとえば武田泰淳は「私の一冊『司馬遷』」（『毎日新聞』、1968年3月17日）で、刊行当時を回顧して、山本健吉から雑誌『批評』の同人に誘われたこと、河上徹太郎、中村光夫、吉田健一といった「有名な文学者」と「話合う」関係になったことなどを書き記している。なお引用は『武田泰淳全集』第16巻（筑摩書房、1979年6月、251頁）による。

家ではあるものの、1980年代初頭の日本ではすでに「日本の若い読書子には耳遠いかもしれない」⁽¹²⁾と言われる存在となっていた。駆け出しの中国文学研究者が翻訳を手がけ、書籍として刊行することを許容した磁場は、すでに自明のものではなくなっている。それを解明することは、少なくとも翻訳が生まれる磁場の力学の一端を浮き彫りにすることにつながっていくことだろう。

2 翻訳者としての武田泰淳

文芸評論家の川西政明は、「中国文学者武田泰淳が作家に変貌した」理由として、『司馬遷』とともに、中国同時代文学の「翻訳を出版していること」をあげていた⁽¹³⁾。この川西の指摘を跡づけるかのように2000年代以降、泰淳と中国語および中国文学の翻訳のかかわりが注目されるようになり、研究も積み重ねられてきた⁽¹⁴⁾。

そうした研究の中で、とりわけ重要な意義を有しているのは、郭偉の論考である。2005年9月に日本近代文学館に寄贈された「武田泰淳コレクション」を調査した郭偉は、「翻訳原稿」と考えられる多数の未発表の原稿を整理し、書誌も明らかにした⁽¹⁵⁾。それによれば、残されている「翻訳原稿」は31に上り、原作者は司馬遷から魯迅まで、周作人や鄭振鐸や老舍など23人となる。原作とみなされる書籍の刊行年がすべて1930年代以前であることに鑑みると、それ

らの「翻訳原稿」は基本的に『司馬遷』以前に手掛けられたものと推定される。文学者となる以前の泰淳にとって、翻訳は重要な営みだったのである。

また郭偉には、実際に発表された武田泰淳の翻訳、耶霊の「駅頭」（『現実へ』第13号、1933年6月）、および蕭軍の「愛すればこそ」「妻なき男」（『現代支那文学全集』第4巻、東成社、1940年5月）などを取り上げた論考もある。そこで郭偉は、発表された泰淳の翻訳として、16の作品をリストアップしている。『増補 武田泰淳研究（全集別巻三）』（筑摩書房、1980年3月）所収の古林尚編「武田泰淳年譜」を参照したというリストには、年譜に記載されているものの刊行が確認できない沈從文『丁玲の思ひ出』（生活社、1941年3月）も入れられており、今後より精査していく必要はあるが、「研究者からも敬遠されてきたように見える」「泰淳における「翻訳」の問題」を前景化した意義は大きい⁽¹⁶⁾。

ちなみに「作家の翻訳」を「研究や批評の対象」とする際に「悩ましい」のは、「下訳者の訳文に作家が手を入れるという共同作業の産物が、共訳ではなく個人訳として世に出されるやり方は半ば制度と化している」⁽¹⁷⁾という特殊な事情が日本にはあるためだ。泰淳でいえば、竹内実との連名で刊行された『毛沢東 その詩と人生』（文藝春秋新社、1965年4月）がそれに近い。もちろん『司馬遷』以前になされた翻訳を考察するに際して、下訳者や共訳者の存在を

(12) 中島みどり「丁玲の軌跡」、中島みどり編訳『朝日選書 199 丁玲の自伝的回想』朝日新聞社、1982年2月、238頁。

(13) 川西政明『武田泰淳伝』講談社、2005年12月、174頁。

(14) 本文で言及したもの以外では、たとえば長田真紀「武田泰淳と「文化集團」（その三）」（『学海』第18号、2002年3月）、大原祐治「北京の輩と兵隊——「中国文学月報」における竹内好・武田泰淳」（『学習院大学人文科学論集』11号、2002年10月）、長田真紀「武田泰淳研究——「改造評論」発表の翻訳「手」について（上）」（『上田女子短期大学紀要』29号、2006年3月）、木田隆文「中日文化協会上海分会と戦時上海の翻訳事業——武田泰淳「上海の螢」を手掛かりとして」（『アジア遊学 205 戦時上海グレーゾーン』勉誠出版、2017年2月）、藤原崇雅「武田泰淳「日本文学の命運」の紹介と翻訳——上海における日本人居留民の中国語評論」（『フェンスレス』第5号、2019年3月）、道園達也「新資料紹介 武田泰淳「現代中国文学の動向」（『芸術科』掲載）と「民国創造と文学」（『東亞論叢』掲載）」（『国語国文学研究』51号、2019年3月）などがある。また本稿を脱稿した後に発表された重要な論考として、郭偉「武田泰淳と翻訳——武田泰淳訳謝冰心「私の見た蔣夫人」を中心に——」（『國學院雑誌』、2020年8月）がある。

(15) 郭偉「武田泰淳の未発表翻訳原稿について」、『近代文学 研究と資料』第2次第1集、2007年3月、178頁～183頁。

(16) 郭偉「武田泰淳における「翻訳」——中国東北関連作品の翻訳にふれつつ、『野草』第76号、2005年8月、35頁～48頁。

(17) 井上健「文豪の翻訳力 近現代日本の作家翻訳」ランダムハウスジャパン、2011年8月、3頁～4頁。

気に掛ける必要はない。むしろ中国文学研究会の同人らからのアドバイスや手助けがあった可能性は十分に考えられるが、そうした援助をまったく受けることなくされる翻訳はおそらく皆無である。

『司馬遷』以前に泰淳が手掛けた翻訳は、未発表のものも含めると、かなりの数に上る。そうした泰淳が、同時代の中国において脚光を浴びていた丁玲の作品を翻訳することは、ある意味で当然だったともいえる。だが結論を急ぐ前に、泰淳と丁玲の遭遇を用意した磁場に目を向けることにしよう。

3 丁玲の登場

武田泰淳は、1929年3月に『小説月報』に発表された丁玲の「他走后」⁽¹⁸⁾を「去りし後」という日本語タイトルで翻訳した。現時点で判明している限り、泰淳の手になる唯一の丁玲の翻訳である。1940年6月に東成社から刊行された『現代支那文学全集9 女流作家集』に収録された⁽¹⁹⁾。また丁玲の作品の翻訳ではないが、1934年9月に良友図書印刷公司から刊行された、沈從文が書いた丁玲の伝記である『記丁玲』⁽²⁰⁾を訳した「女作家の生活」も、泰淳と丁玲のかかわりを考える上では逸してはならない。訳者名が武田泰淳ではなく大島覺⁽²¹⁾になっている

『湖南の兵士』（小学館、1942年9月）に、沈從文の自伝である『従文自伝』（上海第一出版社、1934年7月）の抄訳「湖南の兵士」とともに収録されている。

1902年生まれの沈從文と1904年生まれの丁玲は、中国現代文学を代表する同世代の作家であるというだけでなく、前者が生まれた鳳凰県も、後者が生まれた臨澧県も、ともに湖南省にあり、いわば同郷の仲だった。広大で方言も多様な中国で、同郷である意味は小さくない。事実、丁玲が北京に住んでいた1924年から27年の間に会ったという2人は、その後それぞれ上海に移動して再会した後、丁玲の結婚相手である胡也頻も含めて同じ建物で生活をとにするようになり、29年からは3人で紅黒出版社を始め、月刊雑誌『紅黒』を創刊することとなる。

中国文学研究者の秋山洋子は、丁玲の名を日本に紹介したのは中国文学研究会だったと述べ、1938年9月に大陸文学叢書の一冊として改造社から刊行された岡崎俊夫の『母親』、および泰淳の「去りし後」に加えて奥野信太郎訳「松子」も収めた『女流作家集』を、日本に丁玲を紹介した嚆矢としてあげていた⁽²²⁾。たしかに現在においても丁玲の代表作として知られ、女性の性的な欲望を露わに描き出したことも相俟って評判になった「莎菲女士的日記」（『小説月報』、1928年2月）を訳して、『母親』

(18) 丁玲の原文は、すべて『丁玲全集』全12巻（河北人民出版社、2001年12月）によった。「他走后」は第3巻の229頁～240頁に収録されている。書誌などについては、第12巻326頁～363頁所収の「丁玲著作編年1927年—1998年」を参照した。

(19) 『女流作家集』には、全部で10作品が収録されている。「去りし後」以外に収録された作品は以下の通りである。冰心「最初の晩餐会」、盧隱「悲しみの記」、丁玲「松子」（以上、奥野信太郎訳）、凌淑華「千代子」、蕭紅「家族以外の人」（以上、武田泰淳訳）、馮沅君「旅行」、同「慈母」、冰心「山中雜記」、同「二つの家庭」（以上、猪俣庄八訳）。

(20) 沈從文の原文は、すべて『沈從文全集』全17巻（北岳文芸出版社、2002年12月）によった。本稿において特に参照した「記丁玲」「記丁玲続集」「記胡也頻」「従文自伝」はすべて第13巻に収録されている。

(21) 川西政明によれば、武田泰淳は1912年に大島泰信とつもの三男として生まれたが、生まれてすぐに父の師僧である武田芳淳の遺言によって武田家の家督を相続することになっていたため、武田姓を継ぐこととなった。「覺」は泰淳の幼名である。川西は「泰淳が大島覺の姓名を名乗ったのは、一九一二年二月十二日から九月七日までの間だけである」（川西前掲書、103頁）と書いている。ちなみに川西の調査によれば、「覺」から「泰淳」への改名は1931年5月29日に行なわれたらしい。1942年に刊行された『湖南の兵士』の訳者名として、なぜ「大島覺」が採用されたのか、現時点で確定的なことは言えないが、そこには非常に興味深い問題が秘められているように思われる。

(22) 秋山洋子「在丁玲故居居住过的日本人——洲之内彻与中国」、kindle版『二十世纪中国革命与丁玲精神史 第十二次国际丁玲学术研讨会论文集』清華大学出版社、2017年3月。

に収録した岡崎俊夫の功績は大きい⁽²³⁾。しかし奥野信太郎が訳した丁玲の「松子」は、『女流作家集』に収められる以前の『三田文学』に掲載されていた。したがって日本語の内部に丁玲の名が現れたのは、秋山が言うよりも前ということになる。

岡崎俊夫訳の『母親』ではじめて丁玲を読んだという佐多稲子は、丁玲とのかかわりを次のように回想していた。

丁玲を私が知ったのは、一九三一年か、二年、まだ丁玲の作品を読む前であった。私は当時、日本プロレタリア文化連盟発行の『働く婦人』という雑誌の編集をしていて、その雑誌に、中国の共産党員であり、作家である胡也頻の死を、抗議をふくめて報道したということがある。この文章を多分私が書いたとおもう。そのとき胡也頻の妻としての作家丁玲の名をはじめて知った。「働く婦人」に載ったこの文章を覚えてはいないが、一九三一年二月、江西ソヴェト区に全中国代表者大会が召集されたとき、上海文化団体代表者となった胡也頻は出発直前に蒋介石の国民政府によって逮捕され、二月七日に銃殺されたのである。このとき丁玲は前年十二月に生れた男児小平を抱えてすでに左翼作家連盟に参加して活動中の作家であった。胡也頻の死は、日本政府の、プロレタリア文化運動に対する弾圧に通じるものであり、丁玲の立場には、そのときの私自身の事情のいくらか似たものもあって、私はこのとき丁玲に親近感を抱いたとおもう。⁽²⁴⁾

『働く婦人』に佐多稲子は無署名の記事も書いていた。胡也頻の記事も、そうした記事のひとつだったと思われる。最初の結婚相手との間

に一児を有し、次いで長男を妊娠したことを契機に、1929年に窪川鶴次郎と入籍した小説家は同時に、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）に所属し、日本プロレタリア文化連盟（コップ）にも1931年11月の結成時に参加している。翌年3月には文化運動に対する弾圧に巻き込まれて、結婚した窪川が検挙される憂き目も経験した。翌月には次女も誕生している。それゆえ国民党によってパートナーの胡也頻が逮捕され、秘密裏に処刑されてしまった丁玲の境遇は、おそらく他人事ではなかったに違いない。詩人としてはさほど評価されていなかった胡也頻は、1930年初頭に上海から山東省済南に教師となるために赴いた後、当時は「匪剿」⁽²⁵⁾と呼ばれる国民党による第1回共産党根拠地掃討作戦が展開されていたのだが、急速にプロレタリア文学に接近し、共産党にも入党した。佐多稲子が共産党に入党したのもほぼ同時期、コップへの弾圧が強まっていたさなかの1932年のことである。

『働く婦人』が事件を取り上げ、丁玲に言及したことは驚くにあたらない。しかしコップへの弾圧が強まっている中で、処刑された共産党員の妻の作品が紹介され、翻訳される可能性は皆無に等しかった。丁玲の名が広く知られるようになるのは、もう少し先のことだった。

1933年6月16日の『朝日新聞』朝刊の11面に、「上海全市に密偵網 共産党大弾圧に藍衣社乗出す」と銘打たれた5段抜きの記事が掲げられた。藍衣社は力行社とも呼ばれた中華民族復興社の通称で、蒋介石個人に直属し、その「独裁体制の基盤」となった諜報秘密結社である⁽²⁶⁾。記事は、その藍衣社の幹部が、6月14日午後7時頃、「上海浙江路の東方飯店裏の飲食店スモーク・ハートに自動車に乗付たところ」「狙撃され頭部と胸部に二発の弾丸を受け」「遂に落命した」ことを伝えるものだった。

(23) 『母親』には「莎菲女士の日記」以外に、「母親」「水」「阿毛姑娘」が収録されている。

(24) 佐多稲子「丁玲と私」、高島穰・松枝茂夫訳『現代中国文学 5 丁玲沈從文』河出書房新社、1970年8月、438頁。

(25) 国共合作が崩壊した後の歴史的状況については、石川禎浩『シリーズ中国近現代史 3 革命とナショナリズム 1925 - 1945』（岩波書店、2010年10月）を参照した。「匪剿」については122頁～123頁を参照。第1回は1930年11月から翌年1月、第2回は31年4月から5月、第3回が7月から9月に行なわれた。

(26) 石川禎浩、前掲書、67頁。

重要なのは暗殺された理由である。記事が冒頭でまず伝えたのは、事件が、「去る五月十五日の夕方共同租界で左翼作家丁修人の惨殺およびけい秀作家丁玲と潘梓年が人さらひのため行方不明となつた事件があり、ファッショのあらしに躍る藍衣社の仕業だと一般に噂されて興味を引いてゐた矢先」に起こつたということだった。記事によれば、この行方不明事件が起きた後、亡き孫文の夫人宋慶齡らが憤慨し、上海の「行政院長汪兆銘氏に真相取調べを要求」したのだが、判明したのは「暴漢の乗つた自動車は四二二三である」ということだけだった。ところがなんと今回暗殺された藍衣社の幹部が乗っていた車も「四二二三号」であった。それゆえ事件は共産党による報復であると断定され、藍衣社は「全市に広はん偵察網を張つて共産黨員反蒋介石派政客に大弾圧の手を下し始めた」という⁽²⁷⁾。

事件が起きたのは1932年の第一次上海事変（一・二八事変）の後だったとはいえ、「上海の「魔都」たる特質にもっとも大きな打撃を与え」⁽²⁸⁾るきっかけを作った、1937年8月の第二次上海事変（淞沪会戦）が勃発する以前だった。当時まだ「魔都」の記憶は完全には消え去ってはいなかったに違いない。その「魔都」を舞台に、暗躍する秘密結社によって、著名な女性作家が拉致される。生死はいまだわからない。彼女の夫も2年ほど前に秘密裏に処刑されたばかりだ。脇を固めるのは宋美齡や汪兆銘、そして蒋介石といった名の知られたセレブリティである。スパイ小説、犯罪小説、そして探偵小説に必要な要素はすべて揃っている。フィルム・ノワールのストーリーとしても出来過ぎだ。そんな事件

が現実に起こった。評判にならないはずがない。

この丁玲事件は中国大陆でも、上海を中心に大きな話題を呼んだ。事件直後の5月15日から、上海の『申報』や『時報』によって事件が伝えられ、『中国論壇』といった週刊誌も事件の詳細を報道した。上海で発行されていた『晶報』5月27日号では、「市民読者の眼を引き付けるための一貫した戦略」として、「記事の中にエロティックな要素と探偵小説の色彩を加えて、神秘的な感じを増加させ、刺激性を求める」ものとなった。「娯楽情報の各要素を兼ね備える」ものと化したのだ⁽²⁹⁾。『朝日新聞』の記事も、こうした「市民読者の眼を引き付ける」要素に満ちた報道をふまえたものだったと思われる。

ところで丁玲事件に関心を寄せたのは、中国語圏だけではなく、「プロレタリア文学の前衛的な女性作家」という丁玲の身分はインパクトがあるものだったため、英文雑誌『大晩美報』も事件直後の17日に「丁玲女士失踪」という記事を掲載し、以後も事件に関心を寄せ続けたという⁽³⁰⁾。丁玲の友人だったアグネス・スメドレーは「有名な作家である丁玲の誘拐は、国際的な事件となった。アメリカの作家たち、婦人団体、インテリゲンチヤからの抗議は、丁玲の生命を救った」⁽³¹⁾と書いていたが、アメリカに保存されていた資料を調査した研究者によれば、「丁玲の事件は中国の左翼の知識人に影響を与えただけでなく、その余波はソ連、ヨーロッパ、そしてアメリカを含む世界各地に及ぶ」⁽³²⁾ものとなった。とりわけアメリカの左翼知識人は事件に多大な関心を寄せた。「この

(27) この記事にはいくつかの間違いがあり、たとえば殺された人物の名前は丁修人ではなく応修人である。また事件は、胡也頻亡き後に丁玲と生活をともにしていた馮達による密告によって引き起こされたものだったと言われていたが、馮達への言及もまったくなかった。

(28) 劉建輝「増補 魔都上海 日本知識人の「近代」体験」筑摩書房、2010年8月、252頁～273頁。

(29) 中国大陆での丁玲事件の報道については、劉瀟雨「言説“丁玲事件”——1930年代中国文坛生态之“光谱”」（『現代中文学刊』2013年第4期、80頁～83頁）を参照。

(30) 同上。

(31) アグネス・スメドレー『中国の歌ごえ』（高杉一郎訳）みすず書房、1976年10月、104頁～105頁。

(32) 苏真「如何营救丁玲：跨国文学史的个案研究」、kindle版『二十世纪中国革命与丁玲精神史』前掲書。

事件は中国とアメリカの左翼知識人が交流して活動を展開していくことを促進し、「太平洋を跨いだ文化戦線を組織することとなった」⁽³³⁾のである。

『朝日新聞』が事件を報道した背景には、こうした丁玲事件に向けられた国際的な関心の高さがあった。しかし、「ファッショの波がどこまで及ぶか上海全市の獵奇味を異常に唆つてゐる」という言葉で締め括られる記事は、丁玲の救出のために国際的な連帯を呼びかけ、「ファッショ」に抵抗しようとするアメリカの知識人たちからは遠く隔たっている。むしろ「娯楽」の要素を読者に印象づけようとしているかのようだ。「魔都」を連想させる「獵奇」という言葉が、そのことを端的に示している。

もちろん当時の日本の状況を考えれば、共産党員の丁玲をヒロインのように扱った記事が掲載されたことに、むしろ驚くべきなのかもしれない。前年2月には、築地署で小林多喜二が拷問され命を落としている。それゆえ丁玲事件は決して他人事ではないはずだったが、その報道に小林多喜二を連想させるような要素は何もない。「共同被告同志に告ぐる書」、いわゆる佐野学と鍋山貞親による転向声明が出されたのが、藍衣社事件が報道される4日前の6月10日のことである。全国紙という紙面で丁玲の救出を訴えることはもちろんのこと、丁玲に同情することすら危ぶまなければならない状況だった。それゆえ丁玲事件は、此岸とは関係のない彼岸を舞台にした物語として消費されなければならなかったのである。

言うまでもなく、1931年の柳条湖事件（九一八事変）以来のことを少しでも想起すれば、中国大陸での出来事を他人事とみなすことは許されることなく、むしろ丁玲事件も日本とまったく無関係というわけではなかった。しかし37年7月の盧溝橋事件（七七事変）から本格化した、いわゆる日中戦争下にあっても、「前線」で悲惨な犠牲を強いながら、同時に銃後には好景

気をもたらしていた」がゆえに、「銃後の無関心と無理解」は広く蔓延し、都市では相も変わらず消費生活が享受されていた⁽³⁴⁾。丁玲事件の段階であれば、なおさら「前線」のある大陸は遠かった。それゆえ共産党員の女性作家が国民党によって拉致された事件も、あくまでも「魔都」という彼岸で起こった「獵奇味」あふれる物語として享受され得たのである。また、それが此岸に影響を及ぼさない彼岸の物語であるからこそ、物語のヒロインとして丁玲を遇することも可能となった。小説家である丁玲は、物語のヒロインとして日本語の中で消費されていくこととなったのである。

4 日本語の中の丁玲

1933年に刊行が始まった文藝春秋社の『新文藝思想講座』は、同時期の日本語において「文学」がどのように問題化されていたのかを知る上で、欠かすことのできない資料のひとつである。日本語で書かれたさまざまなジャンルの「文学」が幅広く取り上げられているだけでなく、演劇やラジオや映画も取り上げられ、ジャーナリズムの問題も論じられる。さらには同時代の世界文学の紹介にも力が入れられており、たとえば第1巻と第2巻には西脇順三郎の手になる「最近のイギリス小説」が掲げられている。それ以外にも「最近のイタリア文学」「最近のアメリカ小説」「最近ロシアの小説」「最近の北欧文学」「最近のルーマニア文学」というように、同時代の欧米「文学」を紹介する文章が続く。欧米の「文学」から「新しさ」を吸収しようとする磁場の堅固さを再認識させる内容である。他方、同時代の欧米以外の「文学」は、1933年12月に刊行された第3巻の「特殊研究」欄に掲載された上田永一「支那の現代文学」と、翌年5月に刊行された第8巻の同じく「特殊研究」欄に載った上田永一「支那作家評伝」などに限られる。海外の「文学」を紹介する論考で「特殊」

(33) 同上。

(34) 井上寿一『日中戦争 前線と銃後』講談社、2018年7月、30頁～37頁。

な扱いを受けているのは、「アメリカ大衆文学瞥見」といった、まさに「特殊研究」にふさわしい内容をテーマにした文章を除けば、この2篇だけである。ここには、同時代の中国文学は普遍的なものではなく、あくまでも「特殊」なものであるという認識が顕著に示されている。中国同時代文学は、「特殊研究」として片隅に追いやられても疑念を持たれることがないような代物だったのである。

その2篇の文章両方で、上田永一は丁玲を取り上げた。五四の文学運動以来の中国の現代文学を歴史的に概観した「支那の現代文学」で丁玲は、「殺された胡也頻の妻で、夫と共に左聯に投じた」が、「今年の五月藍衣社のテロのあった時、他の多くの文人達と共にいづれへか拉致され行方不明となつたが、多分虐殺されたものであらうと云はれてゐる」と紹介された。翌年の「支那作家評伝」では、「昨年失踪し、大体暗殺と認められて今は亡い作家だが、記念の意味で彼女を紹介するのも意味ない事ではあるまい」として、矛盾と張天翼とともに取り上げられた。評伝を締め括ったのは、「女らしい俊敏さと、感情の豊富さ」を、左翼への「転換後充分に出し切らない内に死んで行つたと云ふ事は、中国の青年大衆と共に我々の惜みて余りある所である」という丁玲の死を悼む言葉だった。

いずれの文章でも丁玲の死が惜しまれている。しかし、時代状況を考え合わせると、これはいささか理解に苦しむことでもある。「ソヴ

エートから帰った共産黨員」や「無政府主義的思想を持った女」への言及があり、「光明を求めて革命に投ずるもの」も肯定的に書かれた文章であるからだ。検閲の対象となってもおかしくはない。事実、1935年1月に『文学評論』に発表された原勝の「中国革命と女流作家丁玲」には、検閲の跡が多数残されていた。たとえば胡也頻が惨殺されたことを記した直後は、「此処に於いて丁玲は起ち上つた。……即ち、彼女は此……に対する回答として、積極的に……キャンプに参加し、……スピリットをひたむけに犠牲者たる五人の作家の血路を前進して行つたのである」と伏字だらけである。「丁玲の偉大なる犠牲は、大きな損失であらねばならない」という結びの言葉からもうかがえるように、原勝と上田永一の間には、その内容においてほとんど差はない。にもかかわらず、一方には削除の後はなく、他方は伏字で虫食い状態にされていた。

これは発表媒体が大きく関与しているのではないかと推測される。原勝の文章が載った『文学評論』はナルプの解体声明が出された1934年3月に創刊され、「運動組織崩壊直後にあってプロレタリア文学者たちの営みの支柱のような役割」⁽³⁵⁾を果たしたことで知られる。そうした雑誌であれば、厳しい検閲が科せられたのも不思議ではない。逆にいえば、発表媒体を選び、あからさまな言辞を弄することさえしなければ、左翼の作家であろうと、共産党の作家であろうと、中国の作家についての記述や翻訳で

(35) 佐藤勝「文学評論」、『日本近代文学大事典』第五巻、講談社、1977年11月、368頁～369頁。

(36) 『日中の120年 文藝・評論作品選3 侮中と抗日1937-1944』（岩波書店、2016年5月）の「解説」で、編者のひとりである張競は、「戦争が迫ってきたなかでも、両国の作家のあいだに今日想像するよりも往来があり、戦争が起きてからも交信がすべて途絶えたわけではない」と述べ、1937年6月の『改造』に掲載された蕭軍と中野重治の往復書簡に言及し、さらに36年6月の『改造』に蕭軍の短篇「羊」が掲載されて以来、『改造』が中国同時代文学を紹介し続けられたことを意外なこととして扱っていた（290頁～300頁）。中国同時代文学と検閲の問題は、今後慎重に検討されなければならないが、中国同時代文学の言説が、左翼的なものであったり共産主義とかかわりのあったりするものであったとしても、少なくとも表面的には、削除しなければならないほど危険なものとみなされていなかった可能性は高かったように思われる。近年検閲についての研究が進展しており、2000年以降に刊行された代表的なものとしては、紅野謙介『検閲と文学 1920年代の攻防』（河出書房新社、2009年10月）、鈴木登美他編『検閲・メディア・文学 江戸から戦後まで』（新曜社、2012年3月）、紅野謙介他編『検閲の帝国 文化の統制と再生産』（新曜社、2014年8月）、水沢不二夫『検閲と発禁 近代日本の言論統制』（森話社、2016年12月）、辻田真佐憲『空気の検閲 大日本帝国表現規制』（光文社、2018年3月）などがある。しかし中国同時代文学と検閲のかかわりについては、詳らかになっていないことが多い。今後の課題としたい。

あれば、発表にそれほど支障はなかったように思われる⁽³⁶⁾。そうでなければ、この時期以降、中国同時代作家の紹介や翻訳が増えていくこともなかっただろう。

もうひとつ忘れてはならないのは「中国語ブーム」である。安藤彦太郎によれば、「中国への関心は、すでに一九三一年（昭和六年）の「満州事変」のときから、「満蒙の新天地」「五族協和」といったスローガンをともなって形成され」⁽³⁷⁾ていった。その結果、「会話書が、一九三〇年代から四〇年代にかけて、さかんに出版された」⁽³⁸⁾のだが、そうした中国語学習熱の高まりを示す学習書のひとつとして、たとえば一九三四年六月に刊行された『現代支那趣味文選』（文求堂書店）がある。「凡例」によれば、「支那事情の一端を窺ひ且つ支那現行文章を学習せんとする者」のために「近一年間の支那新聞中から趣味に富んだ記事を切抜き、之に比較的詳細な注釈を試みた」書籍だったのだが、そこにはもちろん丁玲の生涯をまとめた「偶述丁玲一頁史」が収録されていた。「丁女士死与不死。吾人初弗得知」という一節が冒頭部に置かれ、丁玲に付された注には、「閨秀作家中の錚々たる人」だったのだが、「秘密裡に銃殺された」夫の胡也頻と「同じ運命を辿つたとの風聞がある」と記されている。学習者の興味を引くには十分である。

旧制浦和高等学校に通いながら東京市本郷区にあった私立の第一外国語学校で中国語学習を本格的に開始し、一九三一年四月に東京帝国大学文学部支那文学科に入学した武田泰淳は、その直後の五月三十日に反戦組織Aの一員として東京中央郵便局でゼネストを呼びかけるビラを撒き検挙され、丸の内署と本富士署に1カ月ほど拘留された。翌年五月にも「第二無産者新聞」を配

布したなどの嫌疑によって、目黒署に約1カ月拘留されることとなった⁽³⁹⁾。拘留を回顧した「謝冰瑩事件」（『中国文学』、一九四七年十一月）には、「私は五月が近づくと、毎年、神経質になり、多少不安だった。それまで三回とも拘留されたのが五月だったからである」⁽⁴⁰⁾と記されている。『増補武田泰淳全集』（筑摩書房、一九七一年十月～一九八〇年三月）に未収録の近年発掘された2篇のエッセイが発表されたのは、泰淳がそうした「不安」とらわれていた時期だった⁽⁴¹⁾。

「中国左翼文壇の現状」と「中国文学情報」は狐塚牛太郎という筆名で発表された。前者の発表は一九三四年七月であり、後者は一九三四年十月である。おそらく前者は、2回目の拘留が解かれてすぐに書き始められたのだろう。掲載された雑誌は『文化集團』。本多秋五によれば、ナルプの機関誌『プロレタリア文学』が「毎月発禁で氣息えんえんとしている」状況下で、「雑多な顔ぶれを並べた商業雑誌の形」で刊行されたプロレタリア文学雑誌だった⁽⁴²⁾。やはり発表媒体によって検閲の厳しさは変わるものなのか、伏字にされた箇所が散見されるその2篇のエッセイで、泰淳は丁玲を取り上げた。

「中国左翼文壇の現状」では、上田永一の「支那作家評伝」を「従来のものにくらべてすぐれたものと言はれやう」と評価し、「丁玲は死し矛盾は創作活動を停止してしまつたから独り精力的に活躍してゐるのは張天翼である」と記されている。また「中国文学情報」では、「魯迅をはじめ矛盾・丁玲等のすぐれた作家は皆農民文学の分野を開いた人であつた」と書き起こし、左翼に転じる以前の短編集『在黑暗中』（開明書店、一九二八年十月）を「彼女がまだ享楽主義におち入つてゐた時代の短編集」とし、その後「自覚し進歩的団体の一員としてすぐれた農

(37) 安藤彦太郎『中国語と近代日本』岩波書店、一九八八年二月、一二二頁。

(38) 同上、四七頁。

(39) 川西政明、前掲書、一五頁～二六頁、一三五頁、四九一頁～四九二頁。

(40) 『武田泰淳全集』第1巻、筑摩書房、一九七八年一月、一三七頁。

(41) 長田真紀「武田泰淳と『文化集團』（その一）」（『上田女子短期大学紀要』、一九九九年三月、五一頁～五八頁）、「武田泰淳と『文化集團』（その二）」（『上田短期大学紀要』、二〇〇一年十二月、四五頁～五〇頁）。

(42) 本多秋五「『文化集團』の回想」（『日本文学誌要』第36号、五頁～一〇頁、一九八七年三月）。

民文学をどしどし書き出した」と評価する。こうした農民文学についての記述は、戦後に農民文学を問題化することになる泰淳を想起させて興味深い⁽⁴³⁾。早くから芽生えた農民文学への関心と丁玲が結びつき、丁玲を大々的に取り上げるようになったのだろう。もちろん丁玲を大きく取り上げたのは、そうした泰淳の個人的な関心によるだけでなく、発表媒体とその読者のことを考えてのことだった可能性も低くはない。若き中国文学者は、読者の中に丁玲への期待が潜在していることを敏感に察知したのではないだろうか。原勝の伏字だらけの「中国革命と女流作家丁玲」を掲載した『文学評論』は、『文化集團』の後継といった位置づけでもあったらしい⁽⁴⁴⁾。そうであれば泰淳の2篇のエッセイが、『文化集團』や『文学評論』の編集部や読者に、何らかの影響を及ぼしたとも考えられなくはない。

1937年1月、雑誌『支那』に発表した「昭和十一年における中国文壇の展望」で泰淳は、「かの失踪事件で日本にも有名だった丁玲女史はいつの間にか再来して『文季月刊』九月号に『团聚』の一篇を発表している」と書き、丁玲が「失踪（検挙）」から生還したことを伝えた⁽⁴⁵⁾。後に明らかになった事実によれば、「一九三六年九月、丁玲は南京を脱出、十月西安を経て、ソヴィエト区の当時の保安に入った」⁽⁴⁶⁾。その直後に短篇小説集『意外集』（上海良友図書印刷公司、1936年11月）を刊行し、健在ぶりを世に知らしめたのである。

ここにおいて「魔都」を舞台に秘密結社が暗躍した拉致事件は一応の解決をみた。しかし丁玲への関心は高まりこそすれ、沈静化することはなかった。『意外集』刊行直後の1936年12月に張学良によって西安事件が引き起こされ、翌年7月の盧溝橋事件（七七事変）を経て、9月に第2次国共合作が成立した。そうした複雑に揺

れ動く政治情勢の中で、かつて国民党によって拉致された経験を持つ、名の知られた共産党員の女性作家が注目を集めないはずがない。東洋協会調査部が編纂し、1937年5月に非売品として刊行された『西安事変後の中国共産軍の動静』は、「左翼閨秀作家丁玲女史のその後」という一章をわざわざ設けているくらいだ。丁玲の扱いは、毛沢東や張学良らと同等である。「共同戦線の下に於て何等も早や摩擦はない、自分は国民党の過去の事に就て非難したくない」とインタビュアーに答える「中国で最も有名な閨秀作家」の存在は、複雑な中国の政治を象徴するものとして遇されていた。

事実『朝日新聞』は、しばしば丁玲の名を紙面に登場させている。たとえば1937年9月6日に掲げられた「赤色支那、いまや必至 国共合作階級闘争へ前進」という「蔣政権は事実上没落」途上にあることを伝える記事では、アグネス・スメドレーが「左翼作家丁玲女史と協力北支の前線部隊に赤化宣伝を開始してゐる」と記されている。また「太原を断固総攻撃 非戦闘員に退去勧告」という37年11月8日に掲載された大きな記事においても、太原のある山西省の「冷酷な雰囲気の中で活発な団体がある、それは丁玲（有名な左翼女流作家）の率ゆる戦地服務団である」とその名が登場し、活動内容が詳細に伝えられていた。翌年1月12日にも「女党员活躍 スメドレー女史語る」という記事の中で、「女共産党员丁玲は素晴らしい活躍をしてゐる」「愛国劇の上演中唱歌で民衆教育に努めてゐる」「毎日ニュースを歌で歌つて聞かせる」と、その活躍ぶりが強調される。以後もたとえば1941年1月16日の特集記事「北支の共産軍と共産党（下）」において、「教育、宣伝に抜け目なし」という状況を伝えるべく、延安には「有名な婦人作家である丁玲を中心とする」学院があり、「文化工作員」を送り出していることが

(43) 武田泰淳と農民文学のかかわりについては、拙稿「武田泰淳の農民文学批判——「紅葉」から『森と湖のまつり』へ」（『桜美林大学紀要 日中言語文化』、2008年3月）を参照。

(44) 本多秋五、前掲論文、10頁。

(45) 『武田泰淳全集』第11巻、筑摩書房、1978年12月、193頁。

(46) 中路みどり、前掲書、255頁。

記されていた。

こうした記事を見ていくと、中国共産党の教育・文化政策のすべてを代表するのが丁玲であるかのような錯覚を覚えそうになる。しかし、それが事実であろうとなかろうと、ここで重要なのは、丁玲への言及がなされるときに枕詞のように付いてまわる「有名な」という修飾である。少なくとも『朝日新聞』の読者の中で、丁玲は「有名」だったのだ。

戦後に出版された『日時計のある風景』（文藝春秋新社、1947年7月）に収められた「丁玲失踪の前後」（56頁～66頁）で奥野信太郎は、丁玲事件は「ガストン・ルルウの小説『黄いろい部屋』（Le Mystère de la chambre jaune）の不思議にもまして、一時世人をして全く五里霧中のうちに彷徨せしめた事件」だったと回顧し、事件を伝えた報道を丹念に検証した上で、記事には「探偵小説的興味」を刺激するものが多かったことを明らかにした。岡崎俊夫も戦後に、「丁玲という名は、胡也頻とのロマンス（あの悲劇をもふくめて）、失踪、延安入り等々で、作家としてより、伝奇小説の主人公として印象づけられている」⁽⁴⁷⁾と書いていた。中国の「文学、にはもちろんのこと、文学」というものにさほど興味を持っていなくても、「探偵小説的興味」に満ちた事件で知られた「伝奇小説の主人公」のような女性作家に、好奇心を刺激されたひとは少なくなかったに違いない。それゆえ『朝日新聞』は、丁玲が読者の中で「有名」であることを前提にして、中国の情勢を伝え続けたので

ある。

丁玲という名は全国紙の読者にとって、すでに常識に属するものとなっていた。「翻訳文学」として丁玲の作品が、「新しさ、をもたらしものとなり得るのか否かはもはや問題ではない。たとえ「新しさ、を求める読者からは忌避されても、それを補って余りある潜在的な読者を、すでに丁玲は手にしていた。少なくとも、そうした予断を許容する状況が到来した。丁玲が翻訳される磁場は、確実に整えられていた。

5 翻訳される丁玲

先にも述べたが、奥野信太郎は、1937年10月の『三田文学』に丁玲の「松子」の翻訳を掲載している⁽⁴⁸⁾。「松子」は1936年4月19日の『大公報』副刊に発表された短篇小説で、失踪から帰還した後に丁玲が健在をアピールした『意外集』に収録された。いわば、丁玲の最新作のひとつである。その末尾に付された「作者について」で奥野は、丁玲事件を詳しく説明した上で、次のように書いていた。

現在彼女は女服を捨てて男装し陝西の西安に、或は三原に来往して政治工作に没頭してゐると伝えられてゐる。しかも現代民国の智識階級にかなり根強い魅力を与へてゐることは、彼女の一挙一動が常に新聞紙上に報道され、沈從文の「記丁玲」が一年半の間に六千冊を売り尽したことからも判断で

(47) 岡崎俊夫「丁玲について」、『近代文学』第6巻第6号、1951年9月、53頁。なお同号は「現代外国作家論」を特集しており、サルトル、カミュ、ジード、モーリアック、アラゴン等の紹介と並んで、小野忍「趙樹理」、齋藤秋男「郭沫若」、竹内好「茅盾」が掲載されている。15人の「現代外国作家」のうち4人が中国の文学者となっている。これは、フランスの文学者と同様に、中国の文学者が「新しさ、をもたらし存在として認知されるようになったということなのだろうか。変化したのが日本語における中国同時代文学の位置なのか、それとも翻訳文学が置かれている磁場そのものなのか、慎重に検討する必要がある。おそらくそれは、マルクス主義や共産主義といったイデオロギーの位置づけとも密接にかかわってくる問題となる。稿を改めて考えることにしたい。

(48) これ以前に発表された丁玲の翻訳としては、1935年10月の『日本評論』に掲載された「水」がある。なお「水」の日本語訳の初出は、一戸務『支那の発見』（光風館、1942年1月）によって知ることができた。この著作は1930年代、日本語の中で中国同時代文学がどのように扱われていたのかを考える上で重要である。「閨秀作家素描」や「冰心と丁玲」など、丁玲に言及した文章も含まれている。収録されている文章の初出の確認が難しく、今回は活用できなかったが、東京帝国大学支那文学科の卒業生で竹内好や武田泰淳の先輩であり、小説も書き、中国文学の翻訳や紹介も手がけた一戸務の存在は、中国文学研究会の位置を再確認する上でも無視することはできない。今後の課題としたい。

きることかと考へる。(181 頁)

奥野が的確に指摘したように、丁玲事件は上海を中心とした出版界に大きなビジネスチャンスをもたらした。良友図書印刷公司以良友文学叢書を担当していた若き編集者の趙家璧は、丁玲が失踪し生死も不明だった段階で、魯迅の勧めを容れて、未完だった『母親』（『大陸新聞』、1932年6月15日～7月3日）を良友文学叢書の一冊として刊行した（33年6月）。その結果、『母親』は良友文学叢書で最も売れた本となり、良友図書印刷公司以大きな利益をもたらした⁽⁴⁹⁾。佐多稲子が最初に読んだ丁玲だと言っていた岡崎俊夫訳『母親』は、丁玲事件が惹起したビジネスチャンスの産物だった。

『母親』の成功を目の当たりにした趙家璧は、次いで沈從文にオファーを出す。その結果、天津の『国聞周報』に1933年7月24日から12月18日まで連載されたのが「記丁玲女士」であり、巴金の回想によれば、大きな評判を呼んだらしい。翌年9月、「記丁玲女士」の後半部分は国民党中央宣伝委員会図書審査委員会によって出版禁止とされたため、前半部分だけが『記丁玲』と改題の上、『母親』と同様に良友文学叢書の一冊として刊行された⁽⁵⁰⁾。これまた売れ行きは好調だった。『湖南の兵士』に収録された武田泰淳の「女作家の生活」は『記丁玲』を訳したものである。泰淳もまた丁玲事件がもたらした活況の恩恵を受けていた。

これらの成功によって出版関係者が、「丁玲の旧著の出版は、読者にとって、他人が書いた丁玲を記念した文章よりも魅力的であるのは明らかだと確信した」⁽⁵¹⁾のも当然だった。「莎菲女士日记」「他走后」「水」などを収録して1933年12月に天馬書局出版から刊行されていた『丁玲選集』に、別の出版社から刊行されていた作品などを「付録」として収録した『丁玲選集』

のリニューアル版が、1936年に刊行されたのは、その表れである。こうした大陸の動向が日本の出版社を刺激し、日本でもすでに「有名」になっていた丁玲の作品の翻訳を促したのだろう。

奥野信太郎訳「松子」が発表された1937年10月、ダイヤモンド社が発行していた雑誌『経済マガジン』にも丁玲の翻訳が掲載された。巻頭を「日本何を為すべきか 戦時経済座談会」が飾り、木村毅の「上海戦線逸話」や後藤朝太郎の「動乱の上海を脱出して」など5篇の「戦線ルポルタージュ」が大々的に掲げられた誌面は、「支那事変を抜きにしては何にも話せない今日」（編集後記）を反映したものとなっている。それらと並べられて、「支那傑作短篇」として掲載されたのが、蕭軍の「水霊山島」と丁玲の「去りし後」だった。武田泰淳の「去りし後」と同じく、丁玲の「他走后」を訳したものだ。訳者名がどこにも記されておらず、翻訳したのが誰なのかはわからない。

「他走后」を訳すに際して、泰淳は『経済マガジン』に載った日本語訳を参照したに違いない。「他走后」というタイトルの日本語訳として、「去りし後」は絶対のものというわけではない。人称代名詞「他」を「彼」と訳してもいいし、過去を表す助動詞として「し」ではなく「た」を採用してもいい。

もちろん訳文には差がある。たとえば冒頭の「麗卿刚刚把他送走，是敲过两点夜间」の『経済マガジン』版訳は「麗卿がやつと彼を送り出した時はすでに二時を過ぎた夜中であつた」であるが、泰淳訳では「麗卿がやつと彼を送り出したのは、もう二時を打つた夜中であつた」と、「敲」の意味を訳に取り入れ読者の脳裏に時を打つ音を響かせ、読点を用いて一呼吸入れることで、リズムカルな訳文に仕立て上げられている。

続く部分の「外面下着霏霏细雨，躺在床上

(49) 刘潇雨「新文学的“生意”——“丁玲事件”与1930年代中国新书业」『中国现代文学研究丛刊』2014年1期、73頁～84頁。

(50) 同上。なお後半部分は『記丁玲続集』というタイトルで、良友文学叢書の一冊として上海良友復興図書印刷公司から1939年9月に刊行された。

(51) 同上。

麗卿、感不出那夹在细雨中的峭利的风，她终于把他送走了」は、『経済マガジン』版訳では「外は霏々として細い雨が降つてゐた。けれども床に横たはつてゐた麗卿は此の細い雨に鋭い風がまぢつてゐるのに気がつかなくつたので彼を送り出したのであつた」となっているが、泰淳訳では「外は細い雨がシトシトと降りつづいてゐたのだが、ベッドに横になつた麗卿には細い雨にまじつた鋭い風は感じられなかつた。それ故彼女は彼を送り出してしまつたのである」となっている。

まず気づくのは、文の区切り方の相違である。『経済マガジン』版は「雨が降つてゐた」で区切り、泰淳は麗卿が「彼」を送り出したことを伝える末尾を一文にして際立たせている。この差は大きい。泰淳は、風を感じられなかつた麗卿を描いた部分までを雨の描写としてひと括りにすることで、「彼」を送り出すという麗卿の行為を独立させ、印象づけることに成功した。『経済マガジン』版の訳だと、「けれども床に」以降がすべて麗卿の説明となり、冗漫な印象を与え、つれづれなる思考を麗卿に促すきっかけとなつた、「彼」を送り出してしまつたという行為に焦点を合わせにくくなる。

また泰淳は、『経済マガジン』版で「床」と原文のままになっている単語の訳として「ベッド」を採用し、和室で布団に寝転がっている麗卿を読者が想像する可能性を見事に排除している。雨が降る様子を形容する「霏霏」の訳として「シトシト」と和語を採用しているのは、そのまま読み下すことを慣用化していた「漢学」の伝統から遠く離れようとする意志の表れであるかのようにも思われてしまう⁽⁵²⁾。泰淳は丁玲をあくまでも外国文学として遇し、漢文を読むときのように書き下すのではなく、あくまでも外国語を日本語に置き換える姿勢で、中国語に向き合っていた。

「去りし後」の訳文は、翻訳者としての泰淳の資質を十分に感じさせるものとなっている。だがここで注意したいのは、なぜ「他走后」が二度も続けて訳されなければならなかつたのかということだ。「他走后」は日本ではもちろんのこと、中国でもほとんど注目されず、現在に至るまで研究論文においても言及されることが稀な作品である⁽⁵³⁾。

それを考えるときに大きな示唆となるのは、『経済マガジン』の誌面と編集後記である。編集後記には「丁玲の上海に於ける近代女性の性生活を描きたるもの」と記されていた。また編集部が「力を入れた」という「支那特殊実話」コーナーに収録されたのは、井上紅梅の「南京政府は如何に女学生を操つてゐるか」をはじめ、「己が娘を妻とした革命の父孫文」や「魔都上海と邦人の地位」など、読者のセクシャルな好奇心に応えようとするものばかりだった。恋人である「彼」を送り出した後に「ベッド」の上で「彼」に対する思いを反芻する麗卿を描き、性的欲望を示唆する要素もちりばめられた「他走后」は、そうした誌面にうってつけだった。泰淳も同様に『女流作家集』の冒頭に置かれた「解題」で、「作家胡也頻との恋愛生活を送つてゐた時代の激しい情熱の記録」であり、「其の後の社会におけるあの燃えるやうな生活意欲は初期の彼女の生活の中ではこんな形で醗酵してゐたのか」（4頁）と、セクシャルな要素を多分に含んだ作品であることを示唆していた。

戦後になって刊行された『毛沢東と中国の紅星』（帝国書院、1946年8月）で波多野乾一は、「彼女の伝記は、フラツパーの女学生が、どのやうな径路で共産黨員になつたか？ といふ点で、典型的なもの」（126頁）だと述べ、丁玲を「アバズレ女」（130頁）呼ばわりしていたが、こうしたまなざしは波多野に限られるものではなか

(52) たとえば目加田誠は「霏霏」の例として有名な『詩経』小雅の第七「采薇」の「雨雪霏霏」を「雪霏々として降りしきる」と訳している（『詩経』講談社、1991年1月、89頁）。

(53) 「他走后」を中心的に扱った先行研究としては、現時点では、陳智慧「神秘変幻的爱——以丁玲の《他走后》为个案」（『理论与创造』2010年11月）くらいに限られる。

ったように思われる。そうした好奇心を抱く読者の期待に応えるべく、日本語訳の対象として「他走后」が選ばれた可能性は低くない。丁玲の翻訳を促した要因として、「有名」な女性作家への読者のセクシャルな関心は看過し得ないものである。

おわりに

戦後、文学者となった武田泰淳にとって、書くことの不可能性を露呈させる他者として君臨したものが、少なくともふたつあった。ひとつは「中国」であり、もうひとつは「女」である。「女」を「男にとってあまりにも異物であり」「男である作家が次から次へと未知の自己を開いて行く、無数の鍵」⁽⁵⁴⁾とみなした泰淳は、逆説的な意味で、堅固な男性意識を有した作家だった。そうした泰淳にとって、丁玲を翻訳するという行為は、二重の意味での翻訳を意味することになったはずだ。中国語から日本語への越境であるだけでなく、「女」の紡ぎ出した言葉を「男」がみずからの言葉に置き換えていく行為でもあったからだ。それゆえ丁玲の翻訳を考えることは、泰淳のジェンダー意識とも密接にかかわってくる。

面白いのは、「去りし後」の「解題」で、「何か女性の体内にこもった秘密を知り得たやうな気がしないでもない」と書いていた泰淳が、『湖南の兵士』の「解題」では、「隣国の女性を理解することが、なまやさしい所業でないと、自ら戒めたい感がある」と記していたことだ。女性作家の短篇の翻訳は泰淳に理解をもたらした。しかし男性作家である沈從文の『記丁玲』の翻訳は、「隣国の女」を理解することの困難さを突きつけた。「解題」に何気なく書き付けられた一節であるが、この差を無視してはならない。泰淳にとっての丁玲、そして泰淳にとっての沈從文を考えることは、泰淳を泰淳たらしめたふたつの他者、「中国」と「女」について、

新たな角度からの見つめ直す契機となる。

本稿では丁玲の翻訳が生まれた磁場の分析に多くの紙幅を費やすこととなり、泰淳における丁玲と沈從文については、簡単な示唆にとどめざるを得なかった。稿を改めて泰淳の翻訳作品「去りし後」と「女作家の生活」を分析し、丁玲と沈從文が武田泰淳の文業の中で果たした役割について考えることにしたい。

(54) 「女について」、『女性線』1948年8月。ただし引用は『武田泰淳全集』第12巻（筑摩書房、1979年1月、112頁～113頁）による。